

「南部鉄瓶の裏、表」

岩手大学名誉教授 堀江 皓

岩手県の特産品として今や海外にまで知れ渡っている南部鉄瓶にも裏、表があることを知っている人は、意外と少ないのではないのでしょうか。絵模様が入った鉄瓶は、その絵柄のある面が表なので問題はありませんが、霰（あられ）模様のように絵柄のない鉄瓶は、陳列するときに、注ぎ口を右に向けて置くか、左に向けて置くかで、悩みます。

図1に示した形の違う鉄瓶の正しい置き方はA、Bのどちらでしょうか。答えはAです。これは、茶のお点前が基本となっています。客人の前において、右手で鉄瓶の鉤を持ってお湯を注ぐ場合、客人から鑑賞される面が表で、その面に絵柄や、文字などの模様が施されることに由来しています。南部鉄瓶の産地、盛岡にある岩手県立博物館や手づくり村の展示室に陳列されている数多くの貴重な鉄瓶は、すべて注ぎ口を右にして陳列されています。

しかし、図2に示した昭和60年8月8日に郵政省から発売された「伝統工芸品シリーズ」第5集の郵便切手の絵柄に採用された南部鉄瓶2点（左：絵模様：第2代藤田萬蔵孝保、右：霰模様：第11代鈴木喜八家定、）は注ぎ口を左にして配置されています。これは、切手図柄のデザインにあたり、東京国立近代美術館発行の「現代の食器―注ぐ」の文献を参考にしたためとされていますが、正しい置き方ではありません。



A：口が右

B：口が左

図1 形の異なる南部鉄瓶



図2 南部鉄瓶図柄の記念切手